

小松寺の記

—平家物語周辺伝説をさぐる—

水原 一

一、運命の透視者

平家物語の主題として「運命」という問題に着目したのは石母正氏『平家物語』（岩波新書）が最初であるかと思う。歴史家としての氏の眼にとらえられた文学の意義は、旧来の平家物語観に新鮮な視野を開く事となった。とりわけ壇の浦の滅亡まで平家一門を統率して行く軍事的指揮者である中納言知盛を、平家の運命の果てを予知しつつこれに力の限り抵抗し、その結末を見届けた人物。いわば平家物語とは知盛の見とどけた対象そのものであった——という指摘は今なお魅力を失わない卓見である。木下順二氏が平家物語の原典による群読を試み、その題を「平家物語」とせずに『知盛』と名づけたのも、石母田氏の文学観をそっくり採用したものであ

る。

私も石母田氏の名論によって自分の平家物語観に大きな恩恵を蒙りながら、また別の方向をいつの頃からかたどってみるようになった。

平家物語の運命を早く予知していた人物は他にいなかったわけではない。たとえば有名な「忠度都落」〔八卷七〕——、自分たち一門の滅亡後に到来するはずの平和の世に、勅撰入集の切願を籠めて愛着の歌集を師に託す忠度にも平家の運命ははっきりとわかっていたのであるし、また壮大な落日のごとき平家滅亡史に一点の汚染をつけたといふべき池大納言頼盛の保身の離反も、また平家の運命を予知してこそであった（「池殿都落」〔八卷七〕）。その頼盛に仕えながら結局は西海の一門に走った弥平兵衛宗清という義士も、滅亡の運命を知るゆえにかえってこれに殉じたのであった（「三日平氏」〔八卷一〇〕）。

とりわけ私に関心をひかれるのは、清盛の嫡男重盛が平家全盛期に早くもその衰滅を予言し、自ら死期を早めて、その衰滅の時に居合わせぬ事を祈ったという話（「小松殿死去」〔八卷三〕）である。またその子息の中で左中将清経が、平家西海放浪の間に、前途を見限って豊前柳浦で月明の海に投身したという話（「太宰府落」〔八卷八〕）である。さらに重盛の嫡男維盛が同じ理由で屋島

の本城を脱走し、旧臣滝口入道を訪ねて出家した後、那智の沖に入水したという話（「横笛」より「入水」に及ぶ数章（巻一〇））である。いわば平家嫡流の重盛家系の人々、いわゆる小松一門には平家の運命を正しく予見しつつ、しかも保身安泰をはかる事はせず、またその後まで確認する事もせず、死期を早めて行ったという傾向が見られるのである。確認を伴わぬ確信の行為にしばしば鬼気と神秘とがただようものである事を、我々はたとえばつんぼのベートーベンが自ら聞く事のない楽曲を作ったという事例の中に思い見る事もできるであろう。

歴史の脱落者である小松一門の人々にとって、平家滅亡の運命は見届け確かめる必要のない程に、確固とした必然のなりゆきだったのであり、見届けぬ運命こそが彼等の生命の意味だったのだと私には思われるのである。平家物語の十二巻本と十三巻本（十二巻のあとに建礼門院に関する灌頂巻を付す）との二種の形の中では、十二巻形態が古形であって、その場合全巻の結びは、維盛の遺子六代が処刑されて「平家の子孫は永く絶えにけり」と結ばれる、いわゆる「断絶平家」といわれる形であった——という点にも、文芸構想における小松一門の重味が汲み取られなければならぬであろう。石母田氏も「運命」の問題におけるこの小松一門の立場にある程度に関

心はよせつつ、結局関心の中心を知盛の英雄性へ傾けて行った。それは歴史家の中世史評価の姿勢を以て文学を評する所の業績であり、また限界であったと私は思うのである。

二、小松寺由来

さて現在小松寺と号する、または通称する寺々が全国各地に点々と見出される。その多くは何らかの意味で小松内大臣重盛にゆかりの寺であるという。永井義憲氏『日本仏教文学研究』に収められた「平家物語と観音信仰」の一章にこの小松寺の事が記されている。それによると、寺号を「小松寺」とするもの十一、その他にも別称、通称に小松寺を称するもの、また小松寺に類する由来をもつものなど数寺を数える。しかし中には平家の歴史と無関係、または曖昧なものもある。ただ本尊が多くは観世音菩薩であるという共通点が注目されるのであるという。

小松寺の由来の最も興味あるのは次のような話である。

——平家の重臣であり特に重盛に信任篤かった平氏支流で家貞、貞能の父子がある。寿永二年平家都落の時、貞能は都に留まって木曾義仲との決戦を主張し、一門の

西下に別れて都に戻った。しかし一門の邸宅ごとごとく焼払った後であり、志を同じくする勇士もなく、ついに戦意を失って、重盛の墓を掘り、骨を高野に送り、墓土を賀茂川に流した後、一門と逆に東国へ落ちて行った。東国の武士たちで京都に勤番として滞在していた者は、東国で源氏蜂起の時から囚人となったのであったが、その中の宇都宮朝綱を貞能が預って情をかけた。朝綱ら東国の武士たちは、平家都落に当って赦免されて帰国した。貞能はこの朝綱を頼って行くのである。

——これは平家物語巻七に見える事であるが、その貞能の心境は「世の有様たのもしからずや思ひけん」という事であった。つまり彼もまた平家の運命を予知した一人だったのである。藤原兼実の日記『玉葉』で見ると、たしかに彼は一度は都に戻って源氏と戦おうとしたが、その後は西国へ行き出家したらしい。また鎌倉幕府の日記『吾妻鏡』元暦二年七月七日に、宇都宮朝綱が頼朝に對して貞能の助命を切に乞うたと見え、それによると貞能は西国で平家滅亡以前に離脱して行方不明であったが、最近出家姿で朝綱を頼って来たのであった。この時助命かなった貞能は以後全く歴史の世界から没し去るのであるが、小松寺の中にはこの貞能法師に開基の由来を置くものがいくつも見られるのである。

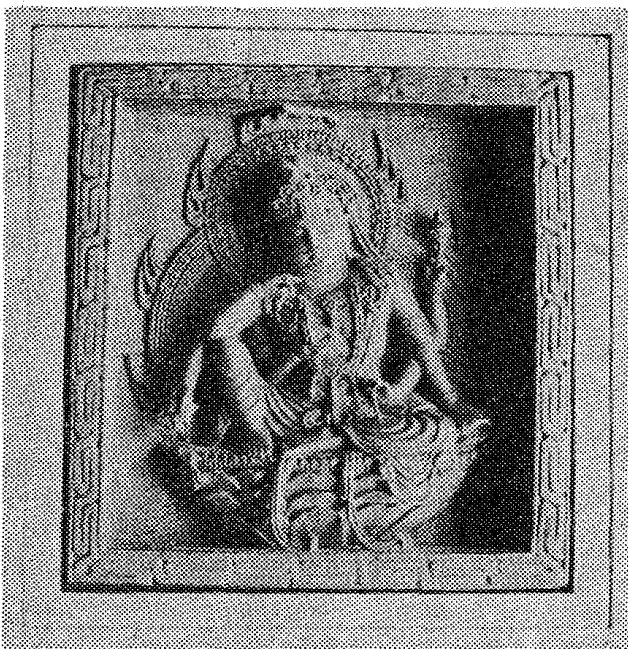
三、貞能の小松寺

〔茨城県東茨城常北町：小松寺〕

常磐線内原から茨城線石塚へ抜ける山間の中程に、蒼々と杉に囲まれた山寺がある。水戸の西北方に当る。遠く天平の頃行基菩薩開基と伝える白雲山普明院に、平貞能が重盛の夫人と妹とを伴って来た。奉持していた重盛の遺骨を背後の山腹に埋め、諸堂を建立して小松寺と号した。もっとも当初は下野の塩原に入り筑波山護持院に移り、さらにこの地に転住したというのである。

貞能は出家して小松以典と称し開山一世となった。二

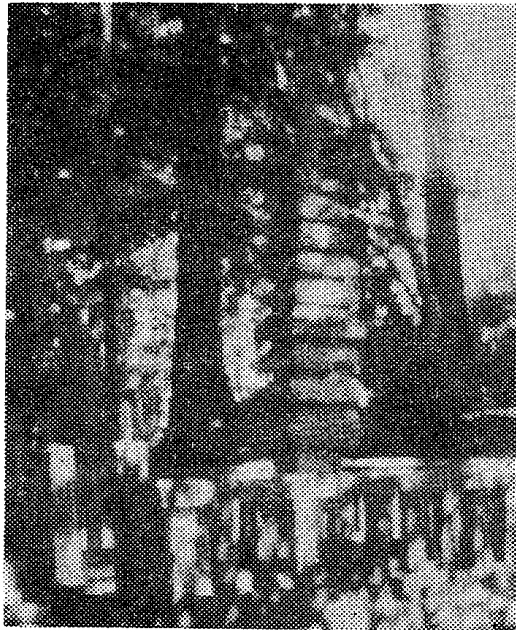
浮彫り観音像（白雲山小松寺）



世盛昌は常陸大掾平義幹の子で貞能らをこの地に案内した人であるという。寺宝に伝弘法大師自作白檀浮彫りの観音坐像（重要文化財）を重盛守護仏の遺品として蔵する。掌にちようど乗る程の守本尊である。重盛夫人は貞能の姉に当る人らしくこの北方に相応院という尼寺を建てたという。重盛の墓と並んで夫人、貞能、盛昌などの墓が老杉とともに古びている。

〔栃木県塩原：妙雲寺〕

右の小松寺の前に貞能らが立寄った塩原というのは塩原温泉街の中間にある甘露山妙雲寺というのに相当する。重盛の妹妙雲禅尼、重盛夫人、貞能らが宇都宮朝綱の好意により、藤原山中釈迦岳に逃れ、一時住んだ後にさらにこの地に庵を結び釈迦像を安置した。妙雲尼にちなんで妙雲寺と号する。寺内に妙雲尼を葬るといふ九重塔がある。



妙雲尼の九重塔（甘露山妙雲寺）

なおこの寺には残夢

禅師の自筆書状と称する文書もある。源義経が奥州高館に最後をとげたとき、臣下ごとごとくこれに殉じた中で、常陸坊海尊一人生きながらえ、合戦の様子を語り歩いてついに不死長寿の仙人となった。残夢はその後名である。西鶴の『諸国噺』の頃にもまだ生きていて義経主従の事を語るといふ奇妙な人物である。塩原は古く日光、那須、筑波等を結ぶ山伏の回路に当たっていたらしく、旅の語り部の足跡がここにかがわれるとすれば、貞能の伝説もそうした経路の中で動くのであったかもしれない。

〔宮城県宮城村定義：西方寺〕

仙山線白沢から北方十二キロ、大倉ダムの上流、人煙を見ぬ山間に忽然として現われる一寺である。貞能が重盛の本尊仏阿弥陀如来を奉じて奥州に身を隠し、ここに往んで名も「定義」と書き改めた。これが地名ジョウゲの由来である。極楽山西方寺と号し通称「定義如来」で知られる。縁結び、子授けの霊仏といわれ、村落もないこの寺には門前に旅館数軒あるのみだが、華麗な二層楼門瀟洒な六角堂、鐘楼等を並べ、参詣客頻繁に繁昌している。仙台から二時間ゆられつづのバス内は折からの農閑期で、娘さんや赤子を抱いた若い母親、婆さんで一ぱいであった。隣席の婆さんに色々聞いているうちに「お



極楽山西方寺本堂

前さんもその方のお祈りですか？」と言われた。背後の小丘は天皇塚と称し安徳帝を祀る。貞能が安徳幼帝の遺品を埋葬して冥福を祈ったのだという。ここには重盛

これらの小松寺の由来はもとより七百余年前の事実をそのまま伝えているものではあり得ない。同型の伝承を持ちながら、妙雲寺は重盛妹、常北小松寺は重盛夫人、西方寺は貞能という風に主要人物を分担して矛盾を釈明する可能性を見せており、特に塩原と常北とは明らかに移転関係を相互に納得し合い提携している。いわゆる伝説遺蹟によくある本家争いがないのである。しかし妙雲尼という重盛妹（すなわち清盛女の一人であり、建礼門院とも姉妹であるはずの）は史実に確められないし、貞能の姉が重盛夫人であった事も肯定も否定もできない。また西方寺の由来はむしろ地名の定義から逆に付会されたものではないかと私には思われるが、それにしても、その事もまた、貞能入道の巡歴やその開基の寺が諸方において得た型を前提にしなければ考えられない事のようにである。

四、宋国渡米の仏像

夫人や妹の伝承はない。
〔茨城県行方郡玉造町：万福寺〕
ここはまだ私は行ってない。常北小松寺で聞いた話では、その何代かの住職が隠居するに当りこの万福寺に移住したものであるという。霞が浦の東岸、銚田線八木蒔の近くであろうと見当をつけている。

× × ×

重盛は生前に宋国に金を贈って自身の追福修善を祈願させていた。平家物語巻三「金渡し」によれば九州から妙典という船頭を招いて、三千五百両を渡し、千両を宋の育王山に納め、二千両を宋帝に献じて田地に替え、これをも育王山に寄付した。残り五百両は妙典への報酬であ

る。育王山の徳光禪師は重盛の心に感じ、その後永く彼の菩提を弔う事となったという。

この話についてはいろいろの事が考えられるが、平家繁栄の原因の大きな一つに對宋貿易がある事などから、あり得た史実とされている。富倉徳次郎先生『平家物語全注釈』に解説があり、大阪府觀心寺には徳光禪師から重盛へ仏舍利を送ったという伝来書が伝わっていること、また九州宗像氏の家人許斐忠太妙典入道という渡海の熟練者がいたといわれている事などが示されている。

宗像は福岡県博多の東、水神として有名な宗像三女神を祀る宗像神社を置き、古代から大陸との航行の一拠点であった。宗像神社に所屬した鎮国寺には宋渡來の石仏、石碑があり、これは重盛の育王山寄付にこたえて宋国より送ったものであるが、時すでに平家滅亡の後であったためそのままこの地にとどめたのだという。この時大藏經一部も共にもたらされたが、後年黒田長政領主の時日光東照宮に奉獻された。

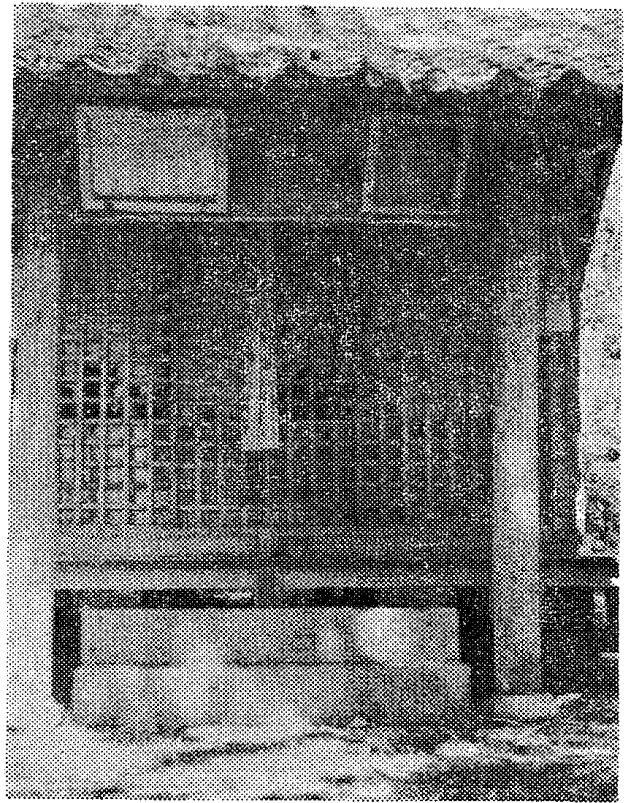
前にあげた小松寺にはこの「金渡し」に接続する要素がある。妙雲寺の伝承では重盛が宋の徑山寺に二千両を贈り、宋帝孝宗は徳光禪師に勅して同寺の釈迦像（妙雲寺本尊）を贈ったという。定義の西方寺の阿弥陀像も同様の伝である。常北小松寺の守本尊は高野山清浄心院よ

り重盛に贈られたものとあって、宋渡來仏ではない。しかし貞能改め小松以典の開基というその僧名には「妙典」との紛わしさが注意される。或は誤写、誤読の關係の推測も可能であろう。

平家物語の諸本中では、延慶本に重盛が宋へ送金に當って、まず貞能に命じたとある。「金渡し」と貞能の連絡を見せるのがこの特殊異本のみである事から見れば、宋國渡來仏を貞能入道が持ち歩いたという小松寺の伝承は、平家物語をヒントにして作り上げたものとは考えがたいのである。ところでこのような宋渡來の仏像を貞能との關係ではなく、船頭妙典と連想される人物と関連させて寺宝とする小松寺がある。

〔京都府龜山市千代川：小松寺〕

京都から木津川をさかのぼった龜山盆地、山陰線千代川駅から二キロ程の所に小松寺がある。道ぞいに爽かな堰が流れる閑雅な聚落のはずれである。寺伝によれば重盛が育王山青竜寺へ納金した返礼として三寸五分の十一面觀音石像（円形浮彫）を贈られた。重盛はこれを持仏としていたが寵臣にこの千代川出身の妙善なる者がありこの石仏を拝領した。重盛死去の後帰郷し出家して、養和元年に觀音堂を建立して石仏を納め金花山小松寺と号した。後年鎌倉の執権最明寺入道時頼が諸国行脚の折に



石仏観音堂（金花山小松寺）

当寺に至り、大乘妙典一石一字を書写して塚を築いたと
いうのがある。

そもそも重盛が金を託した渡海の船頭の名が妙典であり、この小松寺を開いた重盛近習が妙善であり、また最明寺がここに築いたのが大乘妙典の経塚だという。如白本平家物語では船頭の名を妙善と言っている。なお盛衰記では船頭妙典は唐人（宋人というべきであろう）とある。宋に送られた金は陸奥気仙郡から出たともいわれる（延慶本、盛衰記）。金花山小松寺の山号がやはり陸奥の金を産する金華山（気仙の南方）を連想させるのも偶然ではないかもしれぬ。さらに延慶本では重盛が宋国

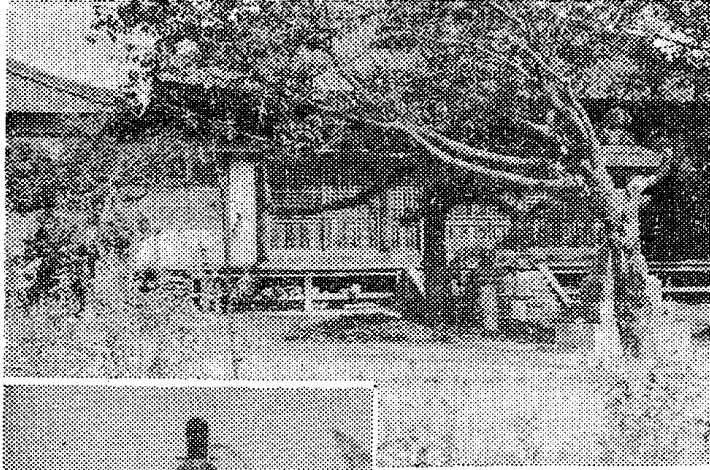
へ送った文というものを載せているが、その目録部には「年来帰依の靈仏一鋪」「一部十卷法花妙典」「黄金千裏」を送る旨を記している。「妙典」は仏書・經典の美称である。「妙善」も仏教語としては妙善公主（観音菩薩の前身）の名に通うが、いずれにしても船頭にせよ、重盛近習の名にせよ、ふさわしいものではないようである。もちろんそれは俗名でなく、法名として説明されるであろうが要するに重盛の金渡しと育王山渡来仏との連絡の中には、何故か妙典乃至妙善ということばが出没するのである。常北小松寺の貞能改め以典もおそらくこれにつながるであろう。そしてそれら紛糾せる諸仏の中心に据えられるのは重盛が法花妙典を書写して宋へ送ったという延慶本所載の文書ではなかったらうか。

五、重盛建立の小松寺

〔愛知県小牧市味岡：小松寺〕

小牧市大字小松寺法華寺というのが地名である。名古屋の北方名鉄大曾根線味岡に近い。味岡荘がかつて平家の荘園であったので、ここにあった古寺（行基菩薩開創という）を重盛が再興し、諸堂を建てたという。隣接して熊野神社が勧請されており、重盛の熊野信仰との関連に思い当る。後に一谷合戦で捕われた平重衡が鎌倉へ

送られる途中ここに一泊したと『旧勝蓬州録』に見える由である。その後度々兵火に遭ってその昔をしのぼせるものもないが、建築は桃山風徳川初期のもの、寺伝の由緒から見て重盛ゆかりの名寺であった事は認めてよい。本堂には今重盛像を祀ってある。なおこの小牧辺は有名な秀吉、家康決戦の小牧長久手の戦の所であり、秀吉はこの寺を本陣としたが当時の往持の法嗣であった前田徳善



味岡小松寺本堂

院玄以法印を抜擢して重用した。秀吉五奉行の一人である。



同寺重盛像

〔愛知県一宮市五反田：小松寺〕

一宮市北端にも小松寺がある。重盛建立と伝える。

私は数年

前ここを訪

うたが街の

一角のさび

れた寺であ

る。住持他

出中寺伝を

知っている

という老女

も不在であ

った。心残

りのままで

ある。味岡の小松寺に憚ってか当寺はあまり由来を主張していないように見うけた。

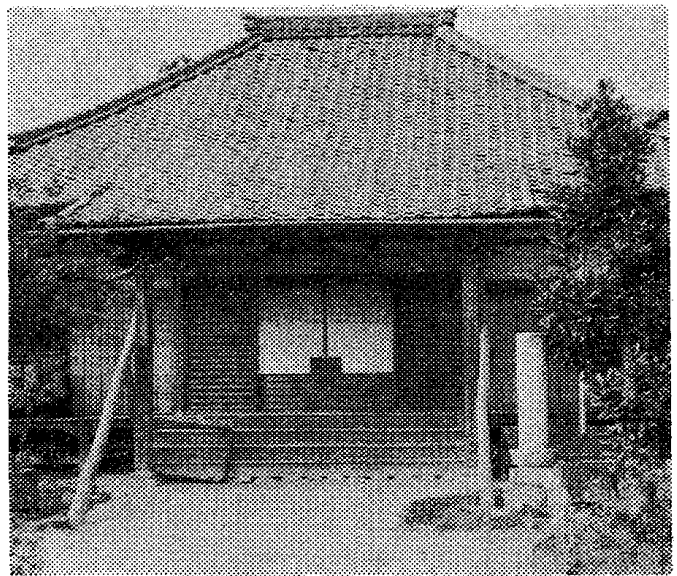
〔愛知県知立市：小松寺〕

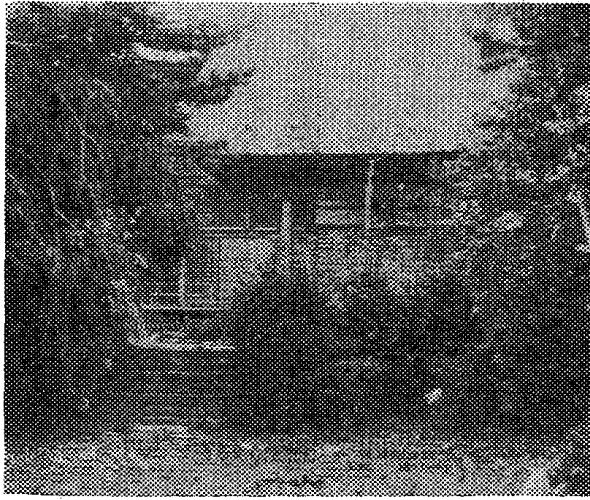
これはまだ私は訪うていないが、やはり重盛開基と伝える由である。

〔名古屋市南区：覆笠寺〕

俗に笠寺観音と呼ぶ十一面観音の寺も古く小松寺と言った。これは平家との関係不明だが項目のみ示しておく。

〔岐阜県加茂郡西田原村：小松寺〕





大慈山小松寺

美濃、尾張のものは
連する寺々であり、
寺は重盛の重臣貞能
による納骨供養に關
連する寺々であり、

× × ×

た。等身大の靈仏、
重要文化財であり、
中世のものとしてよ
いであろうとの事であ
る。

美濃太田から西方、太田、関、各務原の三角形の中心部大杉辺にある。さびれた一寺であった。「重盛公開基、大慈山小松禅寺」と刻んだ石柱のみが大きく建つが、本堂の他は何もなく住持も由緒に詳しくなかった。重盛の命によって国分寺のごとく建てられた一つであり、当初天台、後に禅宗となった。本尊十一面観音であったが、近世に某住職隠居の時神玄寺という所に移され、さらに享保二年洪水に流れて市橋妙見堂に留まった。ここは今日蓮宗の宝積寺となっている。大杉からここを探しあてた時は夜になっていた。住職のかざしてくられる蠟燭の明りにゆらぐ仏像はいかにもしずかであった。



十一面観音像(宝積寺)

重盛生前の建立であるという傾向差を考えられるようである。それにしても濃尾平野に四寺(笠寺をも数えるならば五寺)という集中度は何か考えてみる事があるのかもしれない。味岡小松寺の住職は平家領各国一寺ずつ国分寺になぞらえて小松寺を置いたもので尾張ではこの味岡の他にはないと言っていた。すなわち知立も一の宮も否定される事になる。一宮小松寺では留守番の嫁さんらしい人が味岡の方が本当だそうだと後めたそうに言っていた。

六、その他の小松寺

笠寺古名小松寺のように、小松寺とは称しても平家や重盛などと全く関係のない寺もある。私の訪うた範囲で記しておく。

〔千葉県安房郡健田村：小松寺〕

房総半島の先端部、館山から千倉へ抜ける中間の聚落のはずれにある。古寺であるが由来は不詳というよりも平家との関係は伝説にせよ皆無である。海をへだてた三浦半島の和田三浦の一族と若干のつながりがあるかといひ、朝比奈三郎がここに渡ったとかいうがすべて曖昧である。萱ぶきの大きな寺に老住職夫婦が静かに暮している。鐘楼は古く南北朝期のものといわれる。

〔大阪府北河内郡星田村：小松寺〕

枚方市の南方に当る。片町線星田から妙見山に上りかかる所にある。今は日蓮宗の小寺院であるが由緒古く、かつては堂舎僧房の盛大を誇った大寺であった。群書類従に「河内国小松寺縁起」として載るのはこの寺である。縁起には和銅年間の草創以来諸種の伝を記す。小松寺の寺号は仁明帝の頃、長谷観音がこの里に生えていた小松を以て自ら観音像を刻んだとか、この地の住人小松景光の供養に堂建立したところ堂前に小松を生じたとか

いろいろに言う。しかし平家との関係はない。妙見山には小松神社があり、山頂に巨石を神体とする。星田の名は昔ここに流星が落下した所からの名であるという。妙見の神体は星曜である。武士の間には妙見信仰が盛んであるが、これも特に軍記との関連を伝える事はない。

これらの他にも私の未訪で永井氏の挙げられたものに

〔広島県沼隈郡鞆町：小松寺〕

〔和歌山県那賀郡王子村：小松寺〕

〔滋賀県神崎郡旭村：小松寺〕

などがある。いずれも平家とのゆかりを示す寺である。鞆の小松寺については最近得た報告によると、安元元年に重盛がこの地に護身の阿弥陀仏を安置したのに由来するというのが本尊はやはり観音菩薩である。今は山門のみを残し「重盛公開基小松禅寺」と標示するが往時のおもかげはすべて失われているとの事である。かつて重盛手植の松といわれたものもあつたが近年の台風で倒れたという。

これらの未見の小松寺にもいざれ足を運んで見たいと思つてゐるが、いわゆる国文学や歴史の問題からは横道にそれた、いつてみれば伝説に遊ぶという気持でついでのあるにまかせての探訪である。しかし永井氏も実際に踏査されたものは多くはないようであるし、地名や交通

など変化したものも少なくない。私の足の及んだ範囲で記してみた。思えば物好きな話であるが、こうした古跡、古伝に触れている間に思いがけないヒントの見える事もあるかもしれないのである。

たとえば永井氏はこの小松寺の考察から私など垂涎おさえきれぬ卓抜な意見を出しておられる。それはあの洛北大原の寂光院もまた小松寺なのだという事である。いうまでもなくここは建礼門院徳子の修道閑居の跡であり、徳子は重盛の妹にして尼である。永井氏も、またかつて富倉先生も言われているが、この寂光院の院主の尼は他家から来ても必ず小松姓をなのるのだという。そのいわれは院主自身わからぬが、なぜかそうするのだというのである。それはおそらく重盛を弔い、ひいては平家一門を弔う寺が小松寺であったこと、別の寺号を持つ寺であってもそれは意義において小松寺であったことと深い類似を示すのである。建礼門院の平家一門亡魂供養も、また「小松」の一語に象徴されて不思議はなかったはずなのである。

永井氏はまた大和初瀬の名刹長谷寺も小松寺と称したとの古伝を紹介している。平家との関連ではないが古い事らしい。星田の小松寺の本尊が長谷観音自作の観音像であったという伝説とつながる点があるであろう。平家

物語では重盛の嫡孫六代が平家最後の人として長谷観音の加護によってしばらくの生命を得たとする解釈が巻十二を終ろうとする所に見える。断絶平家の悲劇の中に長谷の利生がほのかに輝くのである。その長谷が小松寺であり、六代が小松の人であるのも偶然ではないように思う。

そうした小松寺をめぐる解釈のひろがり、私をしてなおも文学や伝説の世界に遊ばせようとする。宗像の鎮国寺はその意味においてまさに小松寺そのものである。奇妙な想像のようであるが斎藤別当実盛の最期の地が福井県小松の近くである事なども興味を禁じない。木曾義仲のために北陸で手痛い敗北を喫した平家軍の中で、老武者斎藤別当は白髪を染めて戦い討死した（「実盛最後」八巻七）。笹原に実盛の墓があり手塚町に首洗い池がある。その着用の冑は小松市多田八幡に残る。芭蕉が奥の細道の中で

無残やなかぶとの下のきりぎりす

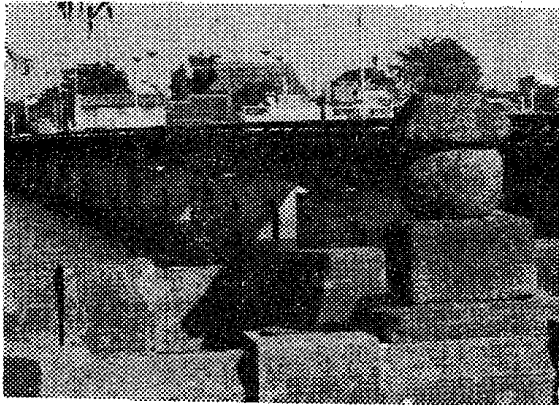
と詠んだのは有名な事である。実盛の墓には時宗十四代の遊行上人太空が詣でて実盛の亡霊に対面したという。謡曲「実盛」の原型となり、ひいては修羅能、夢幻能の構造を説きあかす重要な話とされる。以後代々の遊行上人はみなこの墓を必ず訪うのである。農村の御霊信仰に

も実盛は重要な主人公である。

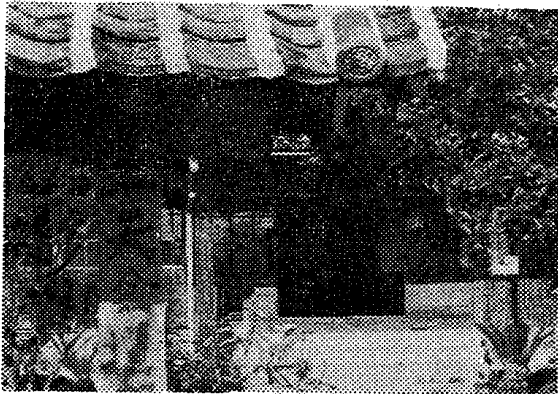
実盛は平家物語では重盛、維盛に仕え平家の衰運を知りつつこれに殉じた。石母田正氏も斎藤別当の運命予知の能力に注目している。しかも二人の子供斎藤五、斎藤六を残して維盛に仕えさせ、維盛はまた都に残した六代をこの兄弟に守護させた。平家物語終曲部をなす六代の物語に、この斎藤兄弟は形影伴ないつづけるのである。

いわば斎藤別当実盛の運命予見の遺志が小松一門を軸とする平家物語の終曲にまで遠く届くのである。その彼の最後の地がやはり小松にかかわるのである。もしこの小松に実盛を弔う一寺があったならば、それは実盛を媒介に平家一門をも弔う小松寺と呼ばれて然るべきであろう。いつの頃にかそういう寺はなかったのであろうか。それともそういう堂寺建立の必要のない、無形の小松寺の意味がその地には生きつづけていると言っているのか。であろうか。

小松の名は平家嫡流小松家に通じると共に、また古代の伝承の世界にしばしば関連する所であった。「小町」の名が伝承に果していた大きな役割とも、その音の類似によっていつとなしに重なり合って行く事になるのである。



清経墓と小松橋（柳浦）



仏光山日輪寺

【附記】 左中将清経の入水に関して小松寺を思わせる一寺のある事を知った。豊前柳浦の入水地は宇佐八幡の西麓を流れる駅館川が周防灘に出る所で、左岸に墓と碑が立ち、傍の橋を小松橋という。上流の江須賀にある仏光山日輪寺というのが、清経妻が家臣淡津三郎と共に来て、夫の菩提のために建てたというのである。謡曲「清経」から出た伝説か、または平家物語の数行にすぎぬ記事を一曲の芸能に組ませる誘因といふべき伝説であったか。ともかくここもまた一つの小松寺であった。住職は宮本武蔵九代の兵法を伝え、今は道場として知られる寺である。